

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

11

長崎



今年長崎を2度訪ね、五島列島にも渡った。今回は中通島へ。十字架の形をしている島は地形が複雑で、特に北側の半島は細く険しい道がひたすら続く。限界集落が点在するこの島では、岬の先端に至るまでカトリック教会が絶えない。

ある集落の教会を訪ねた際、「かなわなければバチカンに行くのが夢。ローマに行かれたあなたがうらやましい」と熱く語られたのが印象的だった。祈りの島々と呼ばれる五島列島を回ってから長崎市に入ると、「祈る」とは何かを強く考えさせられる。

長崎はキリシタン弾圧を経験しただけでなく、原爆の地でもある。爆発で辺り一面が吹き飛ばされた中、廃墟と化した浦上天主堂だけがシルエットを残した。その時の写真からは阿鼻叫喚が聞こえてくる。

天主堂には聖マリア像や十字架、熱で大きく変形したガラス瓶などの被爆遺物が収められている。

心打つ敬虔な祈りの調べ

が、その中でもとりわけ心に迫るのが、被爆で倒壊した家屋のがれきから発見された小鐘だった。イタリア語ではカンパネラ。ミサで司祭が祈りをささげる時、またパンとワインを会衆に示す時に鳴らされる鐘、と説明にある。

フランツ・リストが作曲した「ラ・カンパネラ」は、この小鐘が原意。リストの超絶技巧は悪魔のバイオリニストと呼ばれたニコロ・パガニーニの影響が大きく、この曲もパガニーニが作曲したバ

イオリン協奏曲の一節から作られたもの。鐘のテーマがめくるめく変奏されて、息つく間もなく超人的な技巧が展開されるので、クラシック音楽に精通しない人にも広く知られているピアノ曲のひとつだろう。

「ラ・カンパネラ」で使われた主旋律は、「孤独の中の神の祝福」の終結部でなぞるように用いられる。浮名を流してきたリストだが、50歳を迎えてローマでカトリックの聖職者を志した頃から、数多く

の宗教作品を残すようになり、若き日の栄光の主題ともいえる鐘のテーマは、敬虔な祈りの音楽となつて聴く者の心を打った。

このコロナ禍で、どれだけの祈りがささげられただろうか。平和や幸せといった普遍的なものに、どれだけの心が砕かれただろうか。宗教弾圧や戦争、伝染病といった大きな悲劇の歴史を長崎の地で実感して、被爆カンパネラの前でリストの「祈り」に気づかされた。若いうちは超絶技巧が持つ華や

かさに酔う。私も例外ではなかった。パリで師事したフランス・クリダ先生はいつも、技巧は音楽の下僕でなければならぬといさめた。技巧を見せびらかして拍手喝采を受けるのではなく、作曲者がその技巧の中で表現したかったものに至らなければ、芸術家ではない。音楽は弱い者に響く。私にとつては音楽をすることが信仰でもある。

◇原則第2月曜に掲載します。



浦上天主堂＝長崎市（いずれも赤松林太郎さん提供）



浦上天主堂に展示されているカンパネラ。被爆で倒壊した家屋のがれきから発見された



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

